
バカとある兄妹と召喚獣

黒一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとある兄妹と召喚獣

【Nコード】

N4735T

【作者名】

黒一文字

【あらすじ】

海外から移り住むことになった二重人格者のルナ（セナ）とクレス。文月学園へと編入することになったがルナが風邪、クレスが親に呼ばれ海外へ。Fクラスのバカ共に巻き込まれていく三人？の運命はどうなる？感想受け付けています。

注意1）ルナ（セナ）はBLAZBLUEからです。

注意2）クレスはオリジナルです。

注意3) a n g e l b e a t s ! のキャラを入れました。

注意4) 今後キャラを追加する可能性があります。

プロローグ（前書き）

はじめての小説投稿となるのでよろしくお願いします

プロローグ

科学とオカルトと偶然によってかいはつされた「試験召喚システム」を採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。

「ルナ、そろそろおきろ。遅刻するぞ？」

「ふあゝお兄ちゃん？・・・わかったよ」

・・・さておはよう！ルナの名前はルナ・エステイドだよ！・・・一応日本人だよ？ルナって名前をもらって親に捨てられて。そして、育ててくれた今の家族の名字がエステイドだったので。

・・・あ！早く準備しないとお兄ちゃんに怒られる！ルナは制服に着替えてリビングへ。

4

そこで朝食を食べている時間がないので食パンをくわえて外へ。

そこには、電柱に背中を預けているお兄ちゃんが。

「・・・何処のギャルゲーだよ」

・・・まさかつっこまれるとは。

「何でそこからギャルゲーが？」

「とりあえず走るぞ」

「スルーされた!？」

ルナたちは、文月学園へと走り出した。

プロローグ（後書き）

ルナ「ねえ作者」

作者「何？」

ルナ「この小説どうなるの？」

作者「ぶっ飛びすぎだ」

ルナ「まあどうでもいいけど」

作者「どうでもいいんだ」

吉井「作者あゝ」

作者「何？」

吉井「この小説どうなるの？」

作者「ミステックケース！！」

ルナ&吉井「ぎゃああああ！！」

クレス「バカとある兄妹と召喚獣よろしくお願いします。」

オリジナルキャラ＋設定＋時期（前書き）

ルナ（セナ）はあるゲームから出しています

オリジナルキャラ＋設定＋時期

(女) ルナ・エステイド

(男) セナ・エステイド

『BLAZBLUE』から

10月10日生まれ

身長 142

体重 秘密

ルナは活気あふれる娘

セナは温厚

ここから下の○内はセナのこと

得意科目 数学、古典（保健体育以外全て）

苦手科目 保健体育（同じく）

好きなもの 兄、食べること（特にない）

嫌いなこと 話を聞かない人（特にない）

召喚獣 魔法少女風の服。武器は長い杖

腕輪1つ目『マジカルウェポン』

20点消費で違う武器にできる。使用回数があり、武器によって回

数が違う

腕輪二つ目『魔法』事前に登録した魔法を発動する。種類によって点数消費が違う。普通はNO.を言うだけで発動するが呪文（魔法先生ネギま！？など）を言うとな点数消費が少なくなる

クレス・エステイド

10月9日

身長 162

容姿 童顔で髪は肩まで、前は目にかからないぐらい。髪の色は青。目は右が青、左が緑。

性格 冷静

得意科目 理系全般

苦手科目 なし

好きなもの 信頼できる人、剣術

嫌いなこと 信頼できない人

召喚獣 クレスをデフォルト化した侍風。武器は刀。

腕輪『付加能力』点数消費10点で事前に登録した技を放つ。例はテイルズシリーズの『魔神剣』など

時期

原作
一巻から

オリジナルキャラ＋設定＋時期（後書き）

わからない単語はすみませんが検索で調べてください

第一問 久しぶりの出会い（前書き）

殆どは原作と同じ方向で進めたいと思っています。

それでは、第一問。始まります！

第一問 久しぶりの出会い

第一問 化学

問 以下の問に答えなさい

「調理のために火をかける鍋を作成する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を1つ挙げなさい」

姫路瑞希、クレス・エステーードの答え

「問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例・・・ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、二人は引っ掛かりませんでしたね。

土屋康太の答え

「ガス代を払ってなかったという点」

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

「合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いと言われても

ルナ（唯）・エスティードの答え

「合金の例・・・鉄（取り消し線）ジュラルミン」

教師のコメント

引っ掛かりそうでしたね

明久side

「吉井、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「あ、鉄じ——じゃなくて、西村先生。おはようございます」
軽く頭を下げて挨拶をする。何せ相手は生活指導の鬼、西村教諭だ。目をつけられるとロクな目に遭わない。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

ふう、ヤバかった。危うく普通に『鉄人』って呼ぶところだった。ちなみに鉄人とは生徒の間での西村先生の渾名だ。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

「あ、すいません。えーっと——今日も肌が黒いですね」

「……お前には遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

「そっちでしたか。すいません」

「全くお前と言うヤツには……いくら罰を与えても全然懲りないな」

溜息混じりに先生が呟く。こう言われると、なんだか僕が遅刻の常習犯のように聞こえてしまう。

「先生。僕、遅刻はあまりしていませんよ？」

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

先生が箱から封筒を取り出し、僕に差し出してくる。宛名の欄には『吉井明久』と、大きく僕の名前が書いてあった。

「あ、どうもです」

一応頭を下げながら受け取る。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？ 掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環でワケだ」

「ふーん。そういうもんですかね」

適当な相槌を打ちながら封に手をかける。さてさて、僕はどのクラスになってるんだろう？ 少しドキドキする。

なぜ緊張しているかと言うと、僕の通う文月学園はAからFまであり、二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていく。

『それに、手の内をさらすよりはいいと思うよ、明兄！』

ん、この声は————

そして、この呼び方は————

一分前

ルナside

「ま、間に合ったあゝ」

「・・・・・・・・」

編入初日に遅刻はできないよね。

「・・・・・・・・ルナ」

「何？」

「時間遅かったな」

「え？」

嘘・・・・・・・・そんな

「あ・・・明久だ」

え？明兄？・・・・・・・・ほ、ホントだ！

現在

明久side

「え、あれ？なんでルナとクレスが？」

「吉井。知り合いなのか？」

「ええ、まあ」

「どうしてこ」どうしてここにいるのかと知っているな」・・・ちよつ、勝手に心を読まないでよ、クレス！」

「顔に書いてある」

「・・・」

「明兄、どうしたの？」

「いやなんでもないよ」

「どうしてここに来たか・・・だったな。この話は上でしようか」

「「了解」」

「あ、そうだ。エステイド兄妹。」

西村先生が箱から封筒を取り出す。

「結果はわかっていますのに」

「念のためだ。それと吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

あれ？この封筒、結構頑丈にのりづけされていて、うまく開かない。

「俺はお前を去年一年見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

やっぱりうまく開かないな。仕方がない。上の部分を破くか。

ビツと軽い音をたてて封を切る。中を覗くと、そこには一枚の紙が入っていた。ルナとクレスも封を開けていた。

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。

『吉井明久・・・Fクラス』

『クレス・エステイド・・・Fクラス』

『ルナ・エステイド・・・Fクラス』

「お前はバカだ」

こうして僕の最低クラス生活が幕を開けた。

第一問 久しぶりの出会い（後書き）

吉井「へえ〜。ここでの僕はルナ達とは会っていることになったんだ」

作者「というか幼なじみだな。ルナの呼び方とかが」

吉井「どうして『明兄』なの？」

作者「それはルナが小さい頃に明久を年上だと思っていて、それが根付いたんだと」

吉井「なるほど」

作者「さて、今回はこれにて閉幕」

吉井「次回、バカの集まりFクラス」

作者「いつ更新できるか分かりませんが――」

作&吉『お楽しみに!!』

第二問 バカの集まりFクラス（前書き）

今回はあるアニメのキャラクターが出ます。私の好きなアニメです。

第二問 バカの集まりFクラス

第二問 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
『(2) 泣きっ面に蜂』

クレス・エスティードの答え

- 『(1) 河童の川流れ』
『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』がありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

ルナ・エステイドの答え

『(1) 蜂の川流れ』

『(2) 泣きっ面に河童』

教師のコメント

どういう光景ですか？

明久side

「なんだろう、このバカデカイ教室は」

「同感」

「ルナはこれが教室に見えないんだけど」

「僕もだよ」

「あ、セナ久しぶり」

「久しぶり」

去年は殆ど来たことがない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあろうかという広さをもつ教室だった。

「さて、教室に行こうか」

「「早!」」

「何しろ、俺たちは遅刻だぞ?」

「「うっ」」

は、反論できない。

ルナside

・・・・・・・・・・・・・・・・

「「・・・・・・・・・・酷いな（ね）」」

あれ？目からしょっぱいものが。

「・・・・・・・・と、とりあえずルナから入るね」

遅刻だから悪い印象を持たれないようにしないと。

ガラッ

「すみません。遅れ「早く座れ、このウジ虫や・・・・・・・・ろ・・・・・・・・・・」
う・・・・・・・・・・」

あれ、またしょっぱいものが。

「う・・・・・・・・ひっく」

「ああ！すまん！さっきのは後ろのバ『『殺せー！！』』って
お前ら！カッターとか木刀とかいいが鎌はないだろ！！」

『黙れ！あんなロリっ子を泣かせた罪は重い！』

『『『そうだそうだ！』』』

・・・・・・・・・・という団結力だろう。というかカッターとか木刀とか
ならいいんだ。

「雄二、何やってんの？」

彼、雄二と呼ばれた人はどうやら明兄と友達らしい。

「デホ・・・先生が遅れついいるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって・・・ええと――――」

「坂本雄二だ」

「なんで坂本君が？」

「一応このクラスの最高責任者だからな」

「そうなんだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる坂本君。

「・・・あ、明兄が顔を綻ばしている。何か思い付いたのかな？」

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

「いやいや、まだでしょ」

ルナが一番につっこむ。

しかし、坂本君はそれを無視する。

「それにしても・・・流石はFクラスだね」

明兄がクラスを見渡しながら言う。それについてはルナも思うよ。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

後ろから破気のない声が聞こえてきた。そこには寝癖がついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

「「はい」」

「うーっす」

ルナ達はそこの席につく。

「えー、おはようございます。二年F組担当の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

「……せめてチョークぐらいはしてほしいな。」

「皆さん全員にちゃぶ台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

「センサー、俺の座布団に綿が殆ど入ってないですー」

と、クラスメイトの誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください」

申し出る意味がないじゃん。

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、あとで自分で直してください」

ルナも申請してみよ。

「先生、畳は入れ換えてもいいですか？」

「はい、自己負担であれば」

よ、よかった。だって畳が腐っているもん。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指示を受け、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属している」

？なんで女なのに男子の制服を来ているのだろう。

（ルナ、失礼だよ。あのひとは男だよ）

ええ！？どう見ても女じゃん！

「————と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

木下君……だね。

「……土屋康太」

……って、短！？いや、ほかにもあるだろ！？

それにしても、男ばっか。女子はいないのだろうか。

「————です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

あ、よかった。女子はいたみたい。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は——
——吉井明久を殴ることです☆」

誰！？明兄を殴ると言うピンポイントかつ危険な趣味をもつ人は！

「はろはろー」

「……し、島田さん」

明兄に笑顔で手をふる。ルナはあの人好きになれないな。

（ルナは明久のことが好きだからね）

ちよっ！セナ！？五月蠅いよ！？

クレス side

「仲村ゆりよ。よろしく」

あ、また女子だ。今度の人はリーダーシップとれそうだ。

「音無結弦だ。よろしく頼む」

……なんか突っ込み役みたいな人だな。

「フツ、野田洋次郎だ」

と、言って座る。本人はカッコいいと思っているらしいが周りから見ればれっきとしたバカであるby音無

「……あさはかなり」

いや、あさはかなりじゃないだろ。自己紹介しろよ。

「彼女は椎名枝里よ」

さっきの仲村さんが紹介する。

「藤巻亮太だ、バカ共」

いや、あんたもその一員だろ。

「遊佐未森です」

・・・土屋って奴と似ているな。

「Come on! Let's dance」

『いや、踊らねえよ』

・・・皆、よくわかったな。

注意）クレス&ルナ&セナは英語日本語完璧です。

「日向秀樹だ。よろしくたのむぜ!」

・・・アホだ。

「岩沢正美だ。よろしく」

ん？岩沢の手元に・・・ああ、作曲か。

「ユイにゃ『チャキツ』・・・新井ユイです。よろしくお願いします（ビクビク）。」

アホだ。そして、日向は何処から銃を出した？

「関根史織だよ!よろしく!」

『『付き合ってください!!』『』』

「・・・お断りします」

やっぱりFクラスだ。関根さん、同情するよ。

「高松浩史です。よろしくお願いします」

おい。上を脱ぐな、気持ち悪い。

「直井文人だ。愚民共」

いや、あんたはどここの貴族か金持ちか？

ふう。やっと俺だ。

「クレス・エステイドだ。編入試験が受けられなかったからこのクラスにきた剣術なら誰にも負けない自信がある一年間よろしく頼む」

ん？坂本・・・だっけ？が俺を見て何か考えてたな。

ルナside

お兄ちゃんが終わったので次はルナの番だった。

「えーと、ルナ・エステイドです。編入試験はお・・・クレスと同じです。それと明兄に何かしたら・・・わかるよね？」

『『『・・・（サー）』』』

皆（島田、坂本含む）が一斉に顔を青くした。まあ忠告だけどね。

へルナ、やりすぎだよ？

へそうかな？普通だと思うよ、明兄

と、小さな声でやり取りをする。

さあ、次は明兄の番だよ。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでくださいね♪」

『『ダアアーリーーン!!』』

「……アホ」「アホだ(わ)」「」

ルナと同じ事を言ったのは、仲村さん、音無君、日向君だった。

「——失礼、忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

そう言って明兄は作り笑いでごまかしながら座った。気持ち悪そうだが自業自得だとルナは思う。

その後も他愛のない自己紹介が進む。すると、そこで——

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

教室中から驚いたような声上がる。なんで皆驚いているのだろうか？

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・

・・」

小柄な体をさらに縮こめるようにして声をあげる女の子。

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。その仕草が可愛かった。

「なんでここにいますか？」

聞きようによっては失礼な気がする。

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまって」

その言葉でクラスの皆が『ああ、なるほど』とうなずいた。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かしてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

『野田並のバカがいたなんて』

『何だと？ 貴様、八つ裂きにされたいのか？』

『やめなさい！』

『・・・あさはかなり』

これは想像以上にバカだらけだ。それと野田君・・・・・・・・だっけ？
ハルバートなんて危ないもの振り回さないで

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように明兄と坂本（呼び捨てでいいと言われた）
の隣の空いている卓袱台に着こうとする彼女。

ルナはやることがないから寝よつと！

20分後

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

・・・・・・・・なんで？

第二問 バカの集まりFクラス（後書き）

「「「「「.....」」」」」

さて始まります。後書き雑談会。

ルナ「これ、初めから企画していたの？」

そうだよ。

音無「それにしても以外だな。俺たちが出ているなんて」

ほぼ同じ年だしな

angel beats 一部除く『ああく、成る程』

大山「ねえ僕たちは？」

ああ、BやC、Dとかにいるよ、クライストと橘はAだから

クレス「作者、もう時間だ」

ん、もうそんな時間かそんなじゃこのカンペを.....セナと日向！

セ&日「次回もよろしく（ゝ）！！」

死んだ世界戦線のクラス分け（前書き）

さて、今回は a n g e l b e a t s の皆さんのクラスを公表します。

6月7日 訂正

6月27日 さらに訂正

死んだ世界戦線のクラス分け

死んだ世界戦線の召喚獣の服装はクラスSSSの制服です。

Fクラス

音無結弦
おとなしゆづる

本来はBクラス中堅レベル。風邪をひき、振り分け試験を受けられずFクラス行き。理数系が得意で、350位。
召喚獣の装備は銃。

仲村ゆり
なかむら

本来はCクラス上位レベル
音無の看病をしようとした橘を学園に追い出しFクラスへ。得意な教科はなく、平均点並。
召喚獣の装備は銃とナイフ

野田洋次郎
のだようじろう

振り分け試験をうけたが、成績はFクラス。
召喚獣の装備はハルバート（槍）。

椎名枝里
しいなえり

本来はCクラス下位レベル。店で売られていたぬいぐるみに気を奪われ振り分け試験を受けられずFクラス。古典と現代国語が得意で、300強。

召喚獣の装備は小太刀、くない、煙玉。

ふじまきりようた
藤巻亮太

振り分け試験を受けたがFクラスへ。
召喚獣の装備は刀。

ゆさみもり
遊佐未森

本来はCクラス上位レベル。ゆりと一緒にいたためFクラス。得意な教科はなく、平均点並。

召喚獣の装備は銃。土屋と同じ情報部。

T K

本名は不明。振り分け試験の成績はF。
召喚獣の装備は銃。

ひなたひでき
日向秀樹

本来はEクラス中堅レベル。直井に催眠術をかけられ振り分け試験に行けずFクラス。召喚獣の装備は点数によって、バットか銃にな

る。

岩沢正美
いわさわまさみ

本来はBクラス上位レベル。音無を看病していてFクラス。特に物理が高く、400点強。ほかは百点位。

召喚獣の装備はギター。

腕輪の能力は音波を放つ広範囲攻撃。味方も巻き込む。

新井結衣
あらいゆい

振り分け試験の成績はF。

得意な教科はなく、50点ぐらい。

召喚獣の装備はギター。

関根史織
せきねしおり

本来はCクラス下位レベル。振り分け試験の時は調子が悪くFクラスへ。特に数学が得意で400点強。

召喚獣の装備はベース。

腕輪の能力は音波を放つ広範囲攻撃。味方も巻き込む。

高松浩二
たかまつこうじ

振り分け試験の成績はF。

召喚獣の装備は銃。

なおいあやと
直井文人

霧島、立華、竹山と同じくらいの点数。

腕輪の能力は相手の召喚獣を行動不能にする。その間相手を攻撃できる。点数は一秒10点消費する。発動時に相手と向き合うことが条件。

Eクラス

まつしたごだん
松下護弾

特に保健体育（体育のみ）が得意で、200点強。召喚獣の装備は無し。

あまり出番が無いかも・・・

Bクラス

おおやまじゅん
大山純

得意な教科はなく、平均点より少し上ぐらい。召喚獣の装備はライフフル。

たぶちこ
田渕ひさ子

特に現代国語が得意で400点強。

召喚獣の装備はギター。

腕輪の能力は音波を放つ広範囲攻撃。味方も巻き込む。

いりえみゆき
入江美由紀

特に数学が得意で400点強。

召喚獣の装備は剣。

腕輪の能力は『テイルズシリーズ』の魔神剣を放つ。

Aクラス

たちばなかなで
立華奏

点数は、霧島翔子、竹山クライストと互角。召喚獣の服装は死んだ世界の制服。

召喚獣の装備は『angel player』のハンドソニック。

腕輪の能力はハンドソニック以外のガードスキルが使える。

たけやま
竹山クライスト

点数は、霧島翔子、立華奏と互角。

召喚獣の装備は銃。

腕輪の能力は銃の弾より大きいエネルギー弾を放つ。点数消費10点。

死んだ世界戦線のクラス分け（後書き）

クレス「こうしてみると、以外に多いな」

でもまだ入れようかなと考えているけど。

クレス「入れるな。戦線メンバーの出番がなくなる」

戦線メンバー『!!!!!!』

クレス「しかも、作者は英語がダメだからTKの出番がほとんど無くなる」

TK「Oh no・・・」

まあ、まだ決まったことじゃないから。

TK「!!!!!!」

クレス「『そうなのか?』だって」

戦線メンバー『?』

はい、今後はクレスが通訳係となりました。

クレス「……………作者」

ん？

クレス「『千の雷』」

ガコオオオオン・・・

ぎいやあああゝ!!!!!!

クレス「ふう」

戦線メンバー『・・・・・・・・』

・・・・

クレス「はい、作者は死んだし、戦線メンバーはフリーズしているので・・・・・・・・次回もよろしく！」

注意）死んだ世界戦線メンバーの名前は、名前の由来や『ange l beats』で出た名前などを使っています。

第三問 Dクラス戦作戦会議 前半（前書き）

ル「作者」

作「ん？」

皆『『PV1500、ユニーク250おめでとう!!』』

作「お、ありがとう、皆」

吉「まだ始めたばかりだけだね」

島美「しょうがな——って、作者。何で『島美』な訳？」

作「だって、ここだったら——」

葉『お姉ちゃん！遊びに来たです！』

清『お姉さま〜！』

作「———こういうこと」

島美「なるほど・・・わかったわ」

作「それでは第三問、どうぞ」

第三問 Dクラス戦作戦会議 前半

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希、ルナ・エステイド、クレス・エステイド、仲村ゆり、音無結弦の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか？

吉井明久、野田洋次郎の答え

『○×★※▲◎』

できれば地球上の言語で。

』

日向秀樹の答え

『これは私が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

祖母が抜けています。

ルナside

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『ルナちゃんが欲しい』

『仲村さんに虐められたい』

そんな悲め——って、誰だよ！変態発言したやつ！

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『出来るわけがないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

こんな坂本の言葉を受けてクラスのみ皆がさらにざわめく。

「それを今から説明してやる——おい、康太。畳に顔をつけて姫路とルナのスカートを覗いていないで前に来い」

「……！！（ブンブン）」

「へ？」

「は、はわっ」

さ、流石だ。あそこまで恥も外聞もなく低いアングルから覗くなん
て／／／／／

「土屋康太。こいつがあ有名な『ムッツリーニ』だ」

「……………！！（ブンブン）」

『ムッツリーニだと……………？』

『バカな、奴がそうだと言うのか……………？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ』

ある意味で……………凄い。

「姫路のことは説明する必要はないだろう」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力その一だ。」

そして、皆の声上がる。

「そして、仲村ゆり率いるクラスSSS『死んだ世界戦線』だ」

「あら、何であたし達なのかしら？」

「そりゃ、CやらB、挙げ句、400点もあるだろ？」

そう言えば、彼らの制服は少しどころかかなり違う。文月は基本ブレザーは黒なのに対し彼らの黄色に近い感じだ。

「吉井明久がいる」

シンッ・・・・・・・・

明兄の名前が出された瞬間静かになった。

「ちょっと雄二！どうして僕の名前を呼ぶのさ」

「そうだよ坂本！何でバカの明兄が出てくるのさ！」

「ルナ！さりげなく僕の事バカって呼ばないで！」

まあ、何で明兄がこんなにバカだと思わなかったけど。

「そうか。知らないようなら教えてやる。「何、その上から目線」・

・・・・・・・・こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

なんだろう、それは？

『それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「あ、アホだ」

・・・・・・・・フ、フフフ

ゆりside

・・・・・・・・なんか、ルナさんのところから黒いオーラが出ているけど。

「・・・・・・・・『マジカルジャンヌ』」

『『『『え?』』』』』

な、なんか今杖みたいな奴が光ったよね?

「さあ、貴様の罪を数えろ!!」

「殺るな、ルナ!ここで殺ったら後に響く!」

「・・・・・・・・」

クレス君が後ろから羽交い締めで押さえて説得したらおさまった。
しかし、あたしはこう言い放った。

「早くしてくれないかしら。さっき、姫路さんに言った『切り札その一』って事」

「ああ、わかった」

クレス side

「切り札その二、三は————エステイド兄妹だ」

・・・・・・・・・・は?

「いや、何で俺達がなんだ?」

「・・・・・・・・お前等、アメリ「っ!ストップだ、坂本!」・・・・・・・・

どうしたんだ？」

「坂本。今は言えないから。時期が来たら教える」

「……わかった」

良かった。あの事がバレたらヤバイことになっていた。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!!』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおー!!』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『おおー!!』

やはり坂本はこういうことが得意なのか。

「じゃあルナが行ってくるね」

「いや、ここは明ひ「坂本？」了解であります！」

どういう立場なのか。

「坂本。俺も同行する」

「ん、わかった」

ルナside

はい、ルナたちはDクラスの前に来てるよ。

「ルナゝ。大丈夫なのゝ」

「だだ大丈夫だよ？」

「・・・・・・明らかに大丈夫じゃないな」

「い、逝くよ？」

「字が違う上に何故疑問系？」

ガラッ

「すみません。Dクラスの代表はいますか？」

「ああ、俺だが」

と、行ってこっちに来た平賀君。

「何のようだ？」

「我々FクラスはDクラスに対し宣戦布告する！」

『何、Fクラスだど?』

『生意気な、やっちまえ!』

「お前等やめろ!!」

『!?!?!?』

「相手は無抵抗だ。………すまない、俺のクラスが――」

「いや、大丈夫だ」

「ところで………日時は?」

「明日の10時で」

「わかった」

「ではこれにて」

第三問 Dクラス戦作戦会議 前半（後書き）

「angel beats」room

ゆり「これ、どういう事？」

日向「作者が『もしかしたらキャラが増えるかもしれない』だってさ」

ゆり「ちよつと！それじゃああたし達の出番がなくなるじゃない！」

音無「別にいいじゃないか？ここで出番がもらえるから。なあ、立華、直井」

立華「うん」

直井 「はい、音無さん！」

ゆり「まあ、いいわ」

パ
サ
ツ

日向 「ん？なんだこれ？」

『次回の予告よろしく』

ゆ・ひ・お・た・な 「 「 「 「 ・ ・ ・ ・ 「 「 「 「

日向「ま、いいか」

ゆり「それじゃあ音無君、お願いね」

音無「俺かよ……次回、第四問『Dクラス戦作戦会議
編』よろしく」

後

第四問 Dクラス戦作戦会議 後編（前書き）

オリジナル room

作者「第四問が始まる前に一つ——」

ルナ「KJ様、感想ありがとうございます」

クレス「それと一言もありがとうございます。第2問と死んだ世界戦線のクラス分けを訂正しました」

ルナ「でさ、何で死んだ世界戦線なの？」

作者「アニメ『angel beats!』から」

ルナ「いやそういう訳じゃなくて」

作者「ああ。そういうことか。その事については番外編があるから」

ルナ「わかった。よし、第四問。いっくよー！」

作者「因みに後編なので問題はありません」

第四回 Dクラス戦作戦会議 後編

クレス side

坂本「で、開戦はいつと言った？」

クレス「明日の10時といったぞ」

ルナ「振り分け試験受けてない人がいるからね」

音無「なるほどな」

ゆり「それで、何でFクラスかしら？」

吉井「そうだよ、雄二。どうせならEクラスじゃないの？」

やはり明久はバカだったようだ。

クレス「はあ、いいか？俺は詳しく知らないが姫路は強いのだろう。そして、同じく知らないが『クラスSSS』も相当な力を持っている。これでわかったか？」

吉井「わかった」

坂本「と言うわけだ。回復試験を受ければEクラスは敵ではない。それと何故Dクラスなのかは初陣だからな」

なるほど。Fクラスの皆に召喚獣の実践をかねて・・・か。

坂本「んで、明久。明日は、ちゃんとしたものを食べよ？お前の主

食は・・・水と塩だからな」

吉井「な、失礼な。ちゃんと砂糖も食べているよ!」

ルナ「明兄、それは食べるとは言わないよ」

日向「正しくは舐めるだな」

・・・明久。

姫路「あのう、よかったら私がお弁当作ってきましようか?」

吉井「ゑ?」

ルナ&クレス「明久（明兄）、字が違う」

吉井「本当にいいの? 僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ!」

・・・明久。よく生きてきたな。

ルナside

・・・明兄

島田「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井【だけ】につくってくるなんて」

なんだか面白くなさそうな島田の言葉。そんな言い方して、『やっ

ぱりやめます』なんて言われたら明兄の栄養はどうするのさ！

姫路「あ、いえ！その、皆さんにも……」

坂本「俺たちにも？いいのか？」

姫路「はい。嫌じゃなかったら」

藤巻「それは楽しみだな」

音無「ああ」

ゆり「お手並み拝見ね」

ルナ「でも、人数多すぎない？」

十人以上。さすがに姫路も無理があるだろう。

クレス「それじゃ、俺が作るよ」

吉井「あれ、クレス。料理できたの？」

ルナ「明兄。ルナ達が来たときにクレスが作っていたじゃん」

吉井「あ、そうだった」

坂本「さて、かなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

あ、すっかり忘れてた。

セナ（ダメだよ、ルナ）

う、うるさい！

姫路「あ、あの！」

と、姫路にしては珍しい大きな声。どうしたのだろう？

坂本「ん？どうした姫路」

姫路「あの、吉井さんと坂本くんは、前から試召戦争について話合ってたんですか？」

坂本「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為に明久に相談されて「それはそうと！」」

坂本の台詞を遮るように、声を出す明兄。でも明兄、もう言われたよ。

吉井「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

坂本「負けるわけがないさ。いいか、お前等。ウチのクラスは——最強だ」

それはルナでも明兄でもわかる不思議な感覚だった。

島田「いいわね。面白そうじゃない！」

木下「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

土屋「……………（グッ）」

姫路「が、頑張りますっ」

ゆり「あたし達も頑張らないとね」

日向「ああ。そうだな」

野田「俺はゆりっぺについていくだけだ」

音無「まず一部は回復試験だな」

ルナ「そうだね」

クレス「総合は無理と思うけどな」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢かもしれない。実現不可能かもしれない。
でも、Fクラスの皆だと出来るかもしれない。

坂本「そうか。それじゃ作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、ルナ達は勝利のための作戦に耳を傾けた。

第四問 Dクラス戦作戦会議 後編（後書き）

バカとテストと召喚獣 room

ルナ「こーんにーちわー」

吉井「あれ、ルナ此方に来たんだ」

ルナ「うん。だって此方には二人しかいないから」

坂本「クレスは？」

ルナ「angel beats!のほうに。て言うか、此方には二人しかいないの？」

坂本「ああ。皆やることがあるらしい」

ルナ「さーてとなにしてようか？」

吉井「ええ！なにも決めてなかったの！」

坂本「あいつら二人でなんかやり始めたから————バカとある兄妹と召喚獣、またよろしくな。感想まっているぞ」

第5問 Dクラス戦開始（前書き）

作者執務室

クレス「おい作者」

作者「はい、何でしょう」

クレス「どうして最近投稿できなかったんだ？」

作者「いや、『angel beats』の皆をどうやって書こうかと」

クレス「……………」

作者「クレス？」

クレス「まあ、いいか。スターライトブレイカーでO☆H A☆N A
☆S H Iだ」

作者「魔王が、魔王がいる！」

クレス「はぁー！ー！ー！」

作者「ぎいやぁー！ー！ー！ー！」

ルナ「作者く！アクセス2000おめでとーーーーて、あれ？」

そこに黒焦げのしいたいがあったとき。

作者「勝手に殺すな！！」

第5問 Dクラス戦開始

第4問 数学

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4\sin X + 3\cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を答えなさい。』

(2) $\text{cis}(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、1〜4の中から選びなさい。

- 1) $\text{cin}A + \text{cos}B$
- 2) $\text{cin}A + \text{cos}B$
- 3) $\text{cin}A \text{cos}B$
- 4) $\text{cin}A \text{cos}B + \text{cos}A \text{cin}B$

姫路瑞希、クレス・エステイド、ルナ・エステイド、音無結弦、入江美由紀の答え

『(1) $X \parallel \pi/6$ 』

(2) 4』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) XⅡおよそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ3』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを受ける生徒は君がはじ———

野田洋次郎、の答え

『(2) およそ1』

藤巻亮太の答え

『(2) およそ2』

教師のコメント

——失礼、あなた達が初めてです。

ルナ side

ルナ「ねえ、坂本（ガガガガガ）」

坂本「何だ」

ルナ「教師の方に偽情報を流してほしいんだけど（ガガガガガ）」

坂本「何で……て、そういうことか「因みに（ピタッ）」ん？」

ルナ「明兄を……使ったら……どうなるか」

坂本「わ、わかったから殺気はやめてくれ。須川！」

須川「何だ？」

坂本「戦死した奴を使って偽情報を流してこい。内容は何でもいい」

須川「わかった」

？ いったい何が起こるのだろう

明久 side

ピンポン パンポン

『船越先生、船越先生』

ん、須川君の声だ。

『2－Fの横溝君が体育館裏で待っています』

・・・・あれ？須川君？

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

まさか、横溝君が生け贄に出されるとは。相手はあの船越女史だよ？わかっていて、婚期を逃して、ついに生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、あの船越先生だよ？確かに確実に体育館裏に向かってくれるだろうし、横溝君が来るまで何時間でもその場を離れないだろうけど、その分横溝君が大変なことになるよ？

『横溝、あいつはあ男だよ！』

『ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！』

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ』

『あんなに頑固たる意思を持つてる奴らに勝てるのか？』

Fクラスの皆から喜び、Dクラスから呟きが聞こえてきた。

『須川あ——！！！！』

補習室からそんな声が聞こえたそうなの。

ゆりside

不味いわね。吉井君がなんとか指示を出しているけどどんどん人数が減っていく。

『明久、なんとか持ちこたえろ！』

あれは坂本君！その他にも仲間が！

『合流させるな！』

「クッ！椎名さん！」

「わかった！試獣召喚！」

椎名さんが言うのと椎名さんをデフォルト化した召喚獣が出てきた。

Fクラス

椎名枝里

化学

42点

椎名さんは先程まで試験を受けていたが、時間を切り上げたため、やはり点数が少なかった。

『そんな弱い召喚獣でどうするんだよ』

バカね。今は戦うために呼んだんじゃないわ。

「……………浅はかなり」

ボフンッ

『うわ、何だ!』

『これ、前が見えねえぞ!』

そう。椎名さんの召喚獣は小太刀以外に煙玉が使えるのよ!

「吉井君! もうそろそろ!」

「わかった!」

吉井君は消火器(どこから持ってきたの?)をスプリンクラーに向かって投げ、作動させた。煙が徐々に晴れると――――

「吉井、仲村さん! 待たせたな、試獣召喚!」

「ゆりっぺ待たせた! 試獣召喚」

煙の中から近藤君と藤巻君が飛び出し戦闘を申し込んだ。

Dクラス

中野健太&笹島圭吾

化学

43点&46点

V S

Fクラス

近藤吉宗&藤巻亮太
化学

91点&77点

「くっ！ここは引くぞ！全員遅れるな！」

敵隊長の塚本君の撤退命令がすぐ近くから聞こえてきた。

「深追いはするな。俺たちも明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

流石は坂本君だわ。深追いをして相手の本隊が出て来るのを嫌ったからこんな消極的な命令をしたのかしら？

「さて、無事だったようだな。明久」

「うん、まあね」

クレス side

「ん？」

さっき、坂本が出ていったけど明久を連れて帰ってきた。

「明久、どうだった？」

「うん、Dクラスの前線が退いたから」

「さて、戻ってきたばかりだが……Fクラスの一部を除いてDクラスを打ちに行くぞ！」

『『『おーー！！』』』

明久 s i d e

「Fクラスの皆！退いてくれ！これよりFクラス、岩沢正美が物理の召喚フィールドにいるDクラスに戦いを申し込む、試獣召喚！」

『『『試獣召喚！』』』

Fクラス

岩沢正美

物理

420点

V S

Dクラス

5人

物理

平均93点

『『………は?』』』

Dクラスの人達がアホ面になる。それは当然だ。

………それにしても、ギターでどうやって戦うのだろうか?

「さあ、逝こうか」

岩沢さんがそう言うのと召喚獣の腕輪が光った。ギターを鳴らすとDクラスの召喚獣が吹き飛んだ。そして岩沢さん。字が違うよ?

Fクラス

岩沢正美

物理

420点

VS

Dクラス

5人

物理

0点

どうやらギターを引くと音波が出る能力らしい。

『おい、Dクラスの本隊が来たぞ!!』

どうやらDクラスも勝負に出たらしい。

「クッ。仲村！」

「わかったわ！皆、オペレーション『トルネード』！」

ルナ、クレス、音無side

教えて音無先生

「って、『教えて銀八先生』かよ！」

「はいはい。とりあえずルナ達が聞きたいのはその『トルネード』
はなんの事か聞きたいんだよ」

「まあいいか。『トルネード』は相手クラスの代表の周りにいる生徒
に対決を申し込んで代表を孤立させて撃破する作戦だ」

「なるほど。一回申し込まれると逃げられないからね」

「実際は生徒から食券を巻き上げる作戦なんだ」

「………は？」

「いや、俺も最初はいじめかと思っていたんだが——」

「だが？」

「——岩沢達陽動部隊が演奏しているときに天使を足止めしなければいけなかったんだ」

「天使？」

「あ、その話は今度で」

「わかったよ」

※ルナとクレスと音無は教室で土屋から借りた盗聴器で聞いています。

明久 side

『『『『試獣召喚！』『』『』』』』』

よし、今平賀君の周りには誰もいない。

「向井先生！Fクラス吉井が———」

「Dクラス玉野美紀、試獣召喚」

「なっ！近衛部隊！？」

突然僕の前に現れたのはDクラスの子。

「どうして！さっき平賀君の周りは———」

「うん。その人を倒したから」

彼女が指した方向には哀れな姿の野田くんが鉄人に連行されている場面だった。

「ふん。いくらFクラスでも一人じゃ勝てないだろ？」

ううつ、ムカつく！

でも僕は対抗して、片目をつむって応えてあげた。

「確かに僕には無理だろうね。だから———姫路さん、よろしくね」

「は？」

明らかに『何を言っているんだこの馬鹿は？』といった顔をしている平賀君。

「あ、あの……………」

「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

いまだに現状を理解してない平賀君。そりゃそうだ。彼女がFクラス所属だなんて普通は誰も思わない。

「いえ、そうじゃなくて……………Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……………Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「・・・・・・・・私もだ」

「はぁ。どうも」

「あの、えっと・・・・・・・・さ、試獣召喚です」

「試獣召喚」

Fクラス

姫路瑞希&椎名枝里

現代国語

339点&320点

VS

Dクラス

平賀源二

現代国語

129点

「え？あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対する。

「ご、ごめんなさい」

相手の反撃も許さず、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となった。

第5問 Dクラス戦開始（後書き）

angel beats! room

日向「今回は音無とゆりっぺと椎名っちが活躍したな」

音無「いや、俺は戦闘に参加してないんだが」

直井「いえ、音無さんはその愚図と違って良いことをしました」

日向「ふん。名前すら出番がないお前に言われ「だれが出番がないだって？」おわ!？」

直井「さあ、貴様は何も変わらない愚図だ。携帯電話が便利になった代わり方と比較しているといい」

日向「あ・・・ああ・・・初めは固定電話みたいな携帯が今では片手で扱えるぐらいに便利になっている!それに対して俺はあー!!!」

ゆり「ごるああー!!!!!!! 静かにしろー!!!!!」

立華「・・・・・・『バカとある兄妹と召喚獣』よろしく願いします」

音無「感想待っています」

第6問 Dクラス戦後談・そして過去話（前書き）

作者執務室

黒&クレス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シィ「どうしたの？あれ」

明久「いつまでも書いてなかったからクレスが無言説教中」

シィ「無言・・・・・・・・それは辛いかも。明久」

明久「ん、何？」

シィ「言うことがあるんじゃないかな？」

明久「あ・・・そうだった！カイ（海）・R・銃王様、感想・指摘
ありがとうございます」

第6問 Dクラス戦後談・そして過去話

問 以下の文章の○に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって○である』

姫路瑞希、クレス・エステイド、音無結弦の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

ルナ・エステイドの答え

『 299792458 m/s 』

教師のコメント

なぜ光の速度なのでしょうか。

吉井明久の答え

『粒……何だったっけ？』

教師のコメント

かなり惜しいです。しかし、吉井君が成長しているなと感じます。

直井文人の答え

『神』

教師のコメント

確かに光は速度的には神レベルですが違います。

Dクラス教室

ルナside

Dクラス代表 平賀源二 討死

『『うおおーっ!』』

まったくうるさいな。Fクラスはまだ目標の一步目じゃん。

『すげえよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。あれはDクラスの連中の物になるからな』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ、なんか嫌な予感が・・・

（ルナく耳塞いでく）

（え、何で？）

（クレスが大声出すから）

ちよっ、ヤバイじゃん！こうなったら明兄だけでも！

（明兄！耳を塞いで！）

（え！？・・・わかった、変な予感がするからね！）

ルナと明兄が耳を塞いだ瞬間微かに聞こえた声は――――

「「テメエら静かにしろおおおー！！！」」

――と、耳を塞いでもクレスと仲村さんの声が大きく聞こえた。
え、仲村さん！？

「Fクラスの皆！俺達の目標はAクラスだろ！？」

「そうよ！こんな所で喜んでいたら勝てないわよ！」

『『『………そうだったああああ！！！！』』』

………気づくの遅いよ。

（あ、そうだ。ルナ、変わってくれないかな）

（え、何で？）

（坂本君とちょっと話したいから）

（ん、わかったよ）

セナside

どうも、セナです。僕とルナは一つの体に2つはいつているからね。

「ねえ、坂本君」

「ん、何だ？ルナ」

「ちょっと話したいことがあるんだけど」

「・・・・・・・・わかった。丁度俺も話があるんだ」

・・・・・・・・？いまのまは何だろ？

Dクラス教室前廊下

「で、何なんだ？」

？なんか警戒している感じがする。

「このクラス・・・・奪うきないでしょ？」

「よく分かったな」

「クラスの皆の戦意を消さないためにもね」

「そうだな。では、こちらからも質問だ・・・・・・・・お前は何者だ？」

・・・・・・・・

（どうしよう、ルナ。バレてるかも）

（このバカセナ！あんたののんびり口調がそのまま出てるの！！）

（・・・・・・・・あ）

（とにかく、しょうがないから変わって！）

（わかったよ。でも、一応僕も出てるから）

「・・・・・・・・どうして分かったの？」

「話の最後に語尾を伸ばしていること、それから何か気配が違う・・・・それだけだ」

あ、やっぱりバレてる。

「さっき出てたのはセナ。ルナの双子の弟だった」

「・・・・・・・・だった？」

「うん、そしてセナが病気にいかってもう助からないでいた」

「ッ!？」

「ルナ達の親はどんな方法でも助けようとした。そんな中見つけたのは『魂移植』」

「・・・・・・・・」

「これは成功。でも、ルナ達の親は禁術の使用で捕まって殺され、当時6歳のルナ達は研究所に引き取られた。でも、そこも地獄だった。毎日薬を投与されて、体中変な感じがした。自殺もした。けど死ねなかった。いつの間にか不老不死になってた！死ねないなんて嫌だった！」

「・・・・・・・・」

「でも、そこから救ってくれたのは同じ年で同じ場所にいたクレスだった。クレスは同じようなことをされて何故か魔法が使えるようになった。そこで、ルナはクレスじゃ解けない拘束具を解いて、他の数人と共に外へでた。途中で殺されたりした仲間を連れて見つからないところで野宿した。そして、次の日にルナ達とクレスはエスティード家に引き取られ、他の仲間は他の家に引き取られた」

「・・・・・・・・今のお前は、不老不死なのか？」

「それは、脱走して6年・・・・・・・・クレスが魔法で解いてくれた」

「そうか・・・・・・・・すまなかったな、辛い過去なのに」

「いいよ、あれの事は吹っ切れたから」

「その語尾と声質から・・・・・・・・セナだな？紛らわしいな」

「えへへ、ありがとう」

「いや、褒めてないからね？」

「こうしてみると一人漫才だな」

ガラッ

「坂本君？そろそろ皆に伝えないといけない事があるんでしょ？」

「お、仲村か今行く（グイッ）ん、何だ？」

「（さっきのことは内緒でね？ 明兄にも言っていないから）」

「分かった」

三人称 side

こうして、FクラスはDクラスに勝ったが設備の交換はせず、条件だけ出してDクラスを後にした。その途中でBクラスによって、宣戦布告をしたのは別の話。

第6問 Dクラス戦後談・そして過去話（後書き）

作者執務室

黒「やっと開放された」

ルナ「あれいつからやってたの？」

黒「8時間」

ルナ「8時間!？」

セナ「でも、クレスも立ちっ放しだったのに軽く動いているよ」

黒&ルナ「「あいつナギやラカン、鉄人並!？」」

西村「ほう、いい度胸じゃないか？」

クレス「作者、あれでは物足りないと？」

黒「ギイアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

ルナ「イアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4735t/>

バカとある兄妹と召喚獣

2011年11月13日09時20分発行